

第30回

ヨーロッパ・キリスト者の集い

証と感想



自分の十字架を負って（分科会に参加して）

富永重厚

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

「第30回ヨーロッパ・キリスト者の集い」は私たちのパリ・プロテスタント日本語キリスト教会がホスト教会でした。その準備は本当に大変ではありましたが、主の憐れみとご愛の故に当日を迎えることが出来ました。

天気にも恵まれフォンテーヌブローでの5日間わたる集いが無事終わり290名近い参加者の皆様が無事出発された時、心から主の御名を崇めました。

今回の集いの中での新しい試みとしてテーマ別分科会が持たれました。13のテーマ毎に事前に参加申し込みをして頂き、その中からリーダーとサブリーダーの方を事前をお願い致しました。私は「自分の十字架を負うとは」の分科会を選びました。この分科会には13名が参加され、日本から参加して下さった有木義岳先生がリーダーを務めて下さいました。

第1日目は最初に各自が何故このテーマを選んだのかを発言した後、有木先生が聖書は十字架をどう語っているのかについて聖書の多くの箇所を言及し以下の3つに纏められました。

- 1 私たちの罪を贖って下さったキリストの十字架。（マタイ27、ピリピ2：8等）
- 2 自分に従う者は自分の十字架を負いなさい。（マタイ16：24、ルカ9：23等）
- 3 古い私がキリストとともに十字架につけられた。（ロマ6：6、ガラテヤ2：20等）

次の日の第2回目は前日の有木先生の聖書からの十字架の解き明かしに基づき「自分の十字架とは」につき全員に発言して頂きました。第1日目に有木先生から聖書は十字架をどう語っているかを整理して頂いたのは、自分勝手な十字架の解釈に基づき議論が拡散することを避ける上で非常に有益でした。残念であったのは時間的制約から第3回目が持てなかったことです。各人の発言に基づき議論が更に深められたのではないかと思います。

私は「自分を捨て自分の十字架を負って」とのイエスさまの言葉に震え上がってしまいます。

マタイ10：38でイエスさまがこの言葉を語られた文脈から判断してこの言葉は自己愛を捨ててしかも自分を礎にする道具である十字架を自分で背負って従って来なさいと語っておられるからです。このイエスさまの言葉は容易なことではないからです。その為には十字架を見上げる前に、どうしてもまず眼をこらせて自己の醜さを凝視しなければならぬからです。今年の集いは私に実に重い問いかけをしています。



「信仰者の家族」の交わり

齋藤 篤

ケルン・ボン日本語キリスト教会



記念すべき第30回の集いに参加できたことを、大変嬉しく思います。私にとって2回目の集いへの参加でしたが、昨年度とは打って変わって、2日目朝の祈禱会メッセージ、中高科での3回のメッセージと中高生たちの交わり、CSでのメッセージ1回を担当させていただきました。御言葉の取り次ぎの機会が与えられたこと、それを多くの方々と分かち合うことができたのは大きな喜びでした。

残念ながら、本会場に居合わせることができたのは、毎朝の祈禱会の時とユーオーディア・アンサンブルによる美しい賛美のひと時だけだったのは残念でしたが、それでも集いの大きな「信仰者の家族」の交わりの中で数日間を過ごせたという満足感がありました。

特に、神を信じて生きようとする中高生の一人ひとりと深い交わりが得られたことは大きな喜びでした。真剣に神と向き合い、信じるということをもっと探しく求める姿こそ、私にとっての「信仰点」を想起させる出来事であったに他なりません。あのピュアな感覚を、自分自身が初々と共に得た信仰の感動の思い出と重ね合わせることができました。願わくば、今回出会った若い皆さんがどれぐらい原点からポップ・ステップ・ジャンプをしているかが楽しみです。私も負けじと神様の恵みを戴きながら、信仰者として少しでも成長していきたいと願わされます。



の
もの
の
原
ま
せ
し
さ

また、欧州にある教会や集会の皆さまが、私が仕えている教会と同様の課題を担っていることを知り、大きな励みを受けました。欧州の大きな交わりの中で、これからもひとつの「キリストの体」として協力しながら歩んでいけることを期待しつつ、歩んでまいりたいものです。最後に、この大会のために準備して下さったパリ・プロテスタント日本語キリスト教会の皆さまと、三位一体の神様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

すっかり変えられた私

浜辺若菜

スイス日本語福音キリスト教会

参加する前には、仕事と将来の事でとても悩んでいました。自分ではどうにも解決できない難題を自分で何とかしようと心をかたくなにしていました。現地教会に通い聖書も読んではいましたが、実質的には神様から離れた生活になっていたのです。

しかし、キリスト者の集いに参加して、たまたまお隣になって話した兄弟姉妹がその時の私に最適な答えを与えて下さいました。一つ一つ解決の道を諭して下さいました。かたくなになっていた心を少しずつ解きほぐして下さいました。4日間と言う短い時間でしたが、私をすっかり変えて下さったのです！何の努力もしていない私にも神様は本当に恵み深く寛大です。常に心いっぱい愛して下さいさる神様、ハレルヤ！

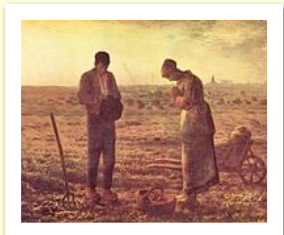


フランスでの集いを思って

シスター・ソハラ

マリア姉妹会・独ダウムシュタット

今回30回目を迎えたこの集いは、私たちヨーロッパに暮らす者にとっていつのまにか、一年に一度真夏に行われるハイライトとなってきています。教職者によって始められたのではなく、一信徒の呼びかけにより始まったとのこと、今年は今までの集いを振り返る写真を見せていただき、この集いが30年も続いてきたことを覚え、本当に感動しました。



生き生きとエネルギーいっぱいの若者たち、御言葉を歌い、手足を使い私たちに伝えてくれた子供たち、みんな

なこの時を心楽しみに待ち、やって来るという事実。私たちの未来を担う彼らのために、献身的に仕えてくださる兄弟姉妹の姿にも、イエス様のはかり知れない愛を見せていただきました。

パリ教会の皆さまは、大変なご奉仕にもかかわらず、いつも優しく忍耐深く、いろいろな質問や願いに対応くださり、ここにもイエス様の柔和、謙遜、親切を感じさせられました。本当にありがとうございます。賛美、音楽は表現できないほどすばらしく、聞かたびに天国に思いを引き上げられたことです。

最後に一緒に聖餐をいただくことができたなら、どんなにかすばらしいだろう、と心の中で願いつつ、御心ならば次回の集いにも参加させていただけることを願い、ベルギーの兄弟姉妹とすべての準備のために祈り始めました。心から感謝して。

信仰に導かれた地で

蜷川いづみ

ユーオーディア・アンサンブル

修養会に今年も参加でき、特にユーオーディア・アンサンブルの仲間たちと賛美コンサートと証の時を持たせて頂き大変感謝でした。

私がパリで洗礼を授かり、日本に帰国した翌年から始まった修養会の歴史と神様のこれまでのお導き、ご計画をあらためて強く思わされ同時にその30年という歲月、私自身が日本において、集うべき教会が与えられ、神様を音楽を通してほめ讃え福音を伝えいくユーオーディアの仲間たちと出会い賛美活動が祝福され、第30回の記念の修養会（しかも開催地は信仰へ導かれたフランス）に96年にクリスチャンになった85歳の父も共に参加できたことは本当に大きな主からの恵みでした。



信仰の原点をもう一度、しっかり心に刻み、日本のみならず世界の救われるべき魂を覚えて祈り、仕えていきたいと願わされた修養会となりました。開催にあたり篤いお祈りが積み重ねられ、沢山のご奉仕がな

されたことを心より感謝いたします。伝道者の書 3:11

与えられた道を歩む事

今野そよ

東京バプテスト教会

欧州でご苦労されながらも神様に祝福されている兄弟姉妹と会い大変励まされました。神様に信頼し、与えられた道を歩むことが証になると改めて気がつかされました。食事の短い時間に、沢山の兄弟姉妹の証を聞くことができ励まされました。



夕食後は一日の疲れが出るので、メッセージに集中できませんでした。故に、スモール

グループでの分かち合いや祈り合い、または分科会にした方が良かったと思いました。又は、夕食前の短い礼拝はいかがでしょう。もう少し、分科会や祈り会の時間があるとよいと思いました。

無牧の中、暗中模索です

桑原昭夫

イスタンブール在住

今回、ウィーンの教会を通じて初参加させていただいた、トルコの桑原です。いろいろな都市で集まりがあることを実感し、自分達だけではないという広がりを感じ、心つよめられました。ヨーロッパの国々とトルコを、私の見方で比べると、伝統的宗教がトルコはイスラム教であ

る事、ヨーロッパの個人主義的なことに比較して、トルコは家族・一族主義である事、でしょうか。制度の遅れや、マナーの違いもあるでしょう。



しかし、最大都市のイスタンブールに住んでいることもあり、ヨーロッパを見ても、確かに差は確実にあるけれど、格段の差までは感じないところです。外人が教会に集っても、トルコ人を引き入れない限りは問題は、ほぼ起きません。ただトルコ人のプロテスタント教会は、ほぼ大都市にしか存在が難しいのが現状と思われます。そんな中、特殊な日本人向けの教会とは？無牧の中、数人での暗中模索です。





毎日が貴重で新鮮な日々

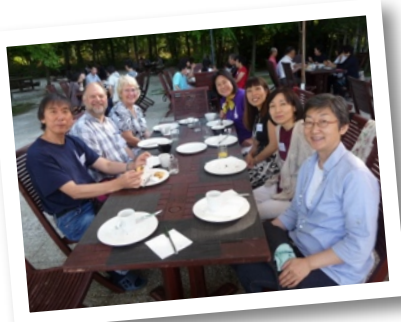
ヘス明美

スイス日本語福音キリスト教会

今回は救われてからずっと祈っていた私の友人が、初めてキリスト者の集いに参加してくれました。私は祈る以外何も出来ないけれど、神様は牧師を通したメッセージ、聖書・賛美により彼女に必要な御言葉や励ましを与えて下さり、また主にある兄弟・姉妹との交わりを持たせて下さり、大変感謝しています。

また私にとっても会うべき方々に会わせていただいた事、そして御言葉を通して新たにチャレンジが与えられた事はとても嬉しかったです。特に食事の際の交わりで、沢山の新しい出会いがあった事、大好きな共通の友人達が居た事、また御言葉を沢山語られ、励ましと助言を下された兄弟との時間など、毎日が貴重で新鮮な日々でした。

それからなんといってもユーオーディアの讃美には感謝以外の言葉が見つかりません。主の栄光をしっかりと見せていただきました。パリ教会の皆様、そして色々なご奉仕をして下さった御一人御一人にも主の豊かな恵みと祝福がありますように！



帰る場所があるから

橋川弘毅

デュッセルドルフ日本語キリスト教会

パリ教会の皆様、素晴らしいヨーロッパ・キリスト者の集いをありがとうございました。今年も豊かな恵みと交わりが与えられました。なんとも居心地のいい修養会でした。もっと何日も続いてくれればと思っていたのですが、すべてのことから解放されて、「ホッと」できる場所、新たに力を与えて下さる場所に帰ってきたと、修養会中思われました。

田辺先生が講話の中で、「私たちは帰る場所があるから、旅が楽しい」と教えて下さいました。この新たな1年も、また帰る場所を楽しみにしつつ、地上の天国のようなこの修養会が、いつまでも続くことを、祈っています。

だからCS奉仕は止められません

井野葉由美

ハンブルグ日本語教会

今年も子どもたちにかかわらせていただきました。子どもたちの素直な反応にはいつも、はっとさせられ、気づかされることが多く、奉仕者が一番恵みを受けているのでは？と毎回思います。「だからCS奉仕はやめられません。」とは、毎年ご奉仕して下さる方のお言葉。

今年はパリの山越淳子さんが素晴らしい御言葉賛美を作曲+振付して下さいました。子どもたちはお父さんお母さんに披露しながら、CSで何を聞いたのかを語ってくれた、と聞いています。あるお子さんは帰りの電車の中5時間、ずっと歌って踊っていたそうです。「周りに日本語がわかる人がいたら、ものすごい伝道になったことでしょう。」とお母さん。いただいた恵みを素直に流していく、子どもたちに見習いたいです。

今年も子どもたちにかかわらせていただきました。子どもたちの素直な反応にはいつも、はっとさせられ、気づかされることが多く、奉仕者が一番恵みを受けているのでは？と毎回思います。「だからCS奉仕はやめられません。」とは、毎年ご奉仕して下さる方のお言葉。

小さな教会に大きな励まし

安藤ファミリー

ミュンヘン日本語教会

今回の集いでは特に奉仕の感謝をした

と思います。先ず家族4人がそれぞれ一回づつ託児の奉仕に入れたこと。長女の真菜が賛美と証しの会でフルートを吹けたこと。里佳子がCS幼小科で奉仕できたこと。又、ミュンヘン日本語教会として講話3の担当をさせて頂き、司会、証し、奏楽、メッセージの奉仕をさせて頂けたことです。それは小さな教会にとって大きな励ましでした。私達の様な小さき者が、この様なご奉仕をさせて頂けたのも、パリ教会の大変なご準備の故でもあります。心から感謝しつつ、私達の主の御名を崇めます。



キリスト者の集いに参加しての感謝

芳賀 秋

東京フリーメソジスト小金井教会

50年間の牧会ご奉仕を退職した故芳賀と共に、ウィーンを始めとしてフランクフルト・スイス・オランダ・ブルッセル・ミラノ・フランス等の日本語教会のご奉仕を田辺先生方、内村先生方諸先生方のご愛労をいただきながら、2003年の6月から2009年までさせて頂きました。その間2004年のドイツのリュネブルグの集いに初めて参加させて頂きました。

その時からこの集いの魅力に取りつかれてしまいました。ヨーロッパの各地域から、教派を超えてキリスト者が一同に集まり聖書信仰のもとに、キリストの名によって真の唯一の全能の創造主を賛美できるこの素晴らしさ、そこで主に在る幸いな交わりと多くの恵みを得ることができました。残念



なことに2010年からは芳賀の体調が良くなく、外国のご奉仕が出来ずキリスト者の集いには参加出来ませんでした。2011年10月2日芳賀は主の許に参りました。一人ではもうキリスト者の集いには参加出来ないと諦めておりましたが、主は再びこの集いに参加することを許して

下さいました。

2012年のオランダでの集いに参加でき、集会後パリに寄らせて頂きました折、作田宅でパリの愛兄弟姉によって80歳の誕生日を祝って頂きました。その時、これで最後のヨーロッパかと感無量でした。しかし、主は今年も参加することを許して下さいました。丁度集いが始まって30年となるこのことと、作田兄弟もパ

リを引き揚げるお話を聞き、私も年齢的には最後になるであろうと思い、どうしても伺いたく祈っておりました。なんと主に感謝したらよいでしょう。

これまで毎年キリスト者の集いが続けられてきたことは本当に素晴らしいことです。少ない人数の国から多勢の国までキリスト者が互いに協力しあってこの集いを盛り上げてきたヨーロッパの愛兄弟姉には頭が下がります。本当に有難く感謝します。私は7、8回ぐらいい



か参加できませんでしたが、以下の幾つかのことを感じ教えられた事を書かせていただきます。

先にも記しましたが、

- ・教派を超えて60名から300名以上の兄弟姉が参加していること。しかも 聖書信仰に立ち、キリストの名のもとになされていること。
- ・いつ参加しても主に在る兄弟姉として受け入れて親しく交わりをいただけること。
- ・祈り合える姉妹がいること。
- ・終わった後も心が温まり主を賛美し、主を証しをしていく力を頂くことが出来ること

でした。

主の臨在のもとにこの集いが続けられることを祈ります。愛労を取って下さる各国の兄弟姉を心から感謝します。主の祝福があり、多くの新しい方々が加えられて続けてヨーロッパの地で主の御名が崇められ、世界に広がって行くまでになりますように背後で祈りつつ。

今後の集いの健全な継承のために

岡崎 信吾

ウィーン日本語キリスト教会

30年前に誕生した有志による信徒の集いが、今年30回という節目の年を迎え、主の御名を崇め感謝いたします。これを機に、数名の委員の方々の労によって「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に関する「沿革」と「目的」が作成され、この集いの主旨が再確認されたことの意義は大きいと思う。

集いは、信仰の基本に立って、聖霊の導きにより各主催教会・集会の自主を尊重しつつ自由で活力と創造性に満ちて発展してきたと思う。しかし今、開始当初のメンバーは、30年たって高齢化が進み若い層への世代交代期にあると思う。今後の集いの健全な継承のためにも、ベテランを尊重しつつ若返りが必要である。そして欧州各地に点在する教会・集会が互いに連携し協力し合って福音が前進し、それが日本はじめ世界へと波及していくことを期待する。



「感謝したいこと、期待すること」

坂野慧吉

浦和福音自由教会



「信仰の原点を求めて」というテーマで開かれた、第30回「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加することを許されて、その祝福にあずかることができたことを心から感謝しています。

《今回の集いでいただいた祝福》

まず第一に、立てられた説教者たちを通して、「信仰の原点に立ち返る」ことを多面的な切り口から教えられたことです。「方法論」に頼ることなく、原則を強調されたことに共感を覚えました。

第二に、パリ教会をはじめとして、信徒の方々の熱心な奉仕の姿勢に感動しました。このような奉仕なしに、この集いは成り立たなかったと思います。

第三に、ユーオディアの方々をはじめとする、クリスチャン音楽家たちの賛美です。レベルの高い技術を持ちながら、謙遜に主を賛美しておられる姿は大きな励ましとなりました。

第四には明確なテーマを持った分科会です。単なる自己紹介に終わるのではなく、自分たちが持っている問題について率直に分かち合い、深いレベルで学びあうことができたのではないかと思います。

《感謝したいこと》

第一に感謝したいことは、この「キリスト者の集い」が一度も欠けることなく、30回継続されたということです。何事でも、新しく始めるのにも力が必要ですが、それを継続するにはもっと多くの力を必要とします。そして「継続は力なり」ということばのとおり、継続することによって「力」がついて来るのです。そして、何よりも神様が始められ、神様が継続させてくださったと信じているのです。

第二に感謝したいことは、このキリスト者の集いが一貫して「福音」に立ち続けて来たということです。30年前と現在とでは、時代が違います。人間関係も、それぞれの必要も異なっています。しかし、聖書が語る「福音」は、どのように時代が変わっても、場所が変わっても、変わることはありません。

第三に感謝したいことは、この集いを通して互いの交わりが祝福され、祈りが積み上げられ、新しい教会、集いが始められたということです。私自身が初めて「キリスト者の集い」に参加したのは、2001年のリヨン大会でし



た。私の記憶では、その当時ミラノにも、プラハにも日本語キリスト教会はありませんでした。しかし、主は不思議な方法で、それぞれの人を用いて、主を礼拝する群れを新しく起こしてくださいました。

《期待したいこと》

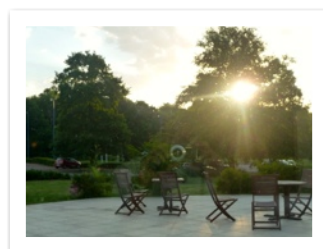
第一は、健全な形で、信仰とリーダーシップの継承がなされることです。その意味では、今回の集いにおいて、中学生と高校生が思いっきり喜んで、主を賛美し、証ししていたことは、大きな励ましであり希望でもありました。彼らが大学生となり、社会人となってもヨーロッパに住み続けて、日本語キリスト教会のリーダーとなってくれることを期待します。

第二は、牧師と信徒の健全なパートナーシップです。いくつかの日本語キリスト教会において奉仕をさせていただいて感じることは、信徒の方々が主によって与えられた豊かな賜物を十分に生かしているということです。このことは、日本にあるキリスト教会も学ばなければならぬと思います。

しかし、もう一面で、信徒の方々がさらに霊的に成長することが必要だと思われされます。「キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師としてお立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり・・・」（エペソ4章11～16節）キリストは、聖徒（信徒）たちがさらに整えられて、福音を宣教し、キリストの教会を建て上げるために、牧師・教師を立てられたのです。牧師は、信徒によって成長させられますが、信徒も牧師によって牧会されることにより、成長することができます。

第三は、それぞれの日本語キリスト教会が、「自分たちの教会に牧師を与えてください」と真剣に祈り、また、そのための備えをすることです。最初は、日本で宣教師として奉仕した宣教師を牧師として招くことも良いかもしれない。また、短期の奉仕者を迎えることも一つの方法かもしれない。

そして、一人の牧師が複数の教会の牧会の責任を持つことも可能であろう。しかし、これらのどの方法もすぐに実現するとはかぎらない。そこで実現可能なのは、それぞれの教会のリーダーのための霊的な養いのための修養会、セミナーをさらに充実させることではないかと思います。



以上、《祝福》《感謝》《期待》を記させていただきました。これからも、ヨーロッパの地で、日本語を話す人々への伝道が進められるように、また、健全な教会形成がなされるようにお祈りして行きたいと思いをします。

信仰の原点ともいべき土地で

柳瀬洋

ユーオーディア・アンサンブル

「第30回目の記念すべきヨーロッパ・キリスト者の集いに、ユーオーディア・アンサンブル6名で日本から参加できたことは、本当に大きな喜びでした。今年は、このアンサンブル結成25周年の記念の年でもありました。そして、ヴァイオリンの蜷川姉と私（柳瀬）は、かつてヨーロッパで救われ（パリとデュッセルドルフ）、音楽伝道を志したという経緯がありますので、私たちにとって、このヨーロッパは信仰の原点ともいべき土地だからです。



今回ほんとうに懐かしい方々に再会することができ、喜びのうちに山ほど積もった主の恵みを分かち合うことができました。また、ヨーロッパ各地で主を礼拝する多くの兄弟方と、かけがえのない出会いをすることが出来

ました。そして私たちに与えられた主の恵みとヴィジョンをお伝えできたと信じ、心から主の御名をたたえました。

さて今回、多くの方々から海外で信仰生活をするこの素晴らしさと同時に大変さをお聞きしました。それゆえに、年に一度のこのヨーロッパ・キリスト者の集いが、どれほど大きな励まし、また力となっているか！...

ということを知りました。そして、この準備のために毎回、主催JCFの皆様がどのような犠牲を払っておられることでしょうか！？...ただただ頭が下がります。主はそのご苦勞の何倍も祝福してくださるからこそ、ここまで回を重ねることが出来たのでしょうか！

これからもずっとこの修養会が続けられますように！私たちもお祈りと音楽の側面から応援したいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。多くの恵みをいただき、大きな励ましをいただいたこと、心から感謝いたします！

第30回ヨーロッパ・キリスト者の集いに参加して

小川洋

ロンドンJRC

‘82年にロンドンJCFで洗礼を受け’83年末に日本に帰りましたから、その時にはまだ「集い」は存在していませんでした。2回目の1年間のロンドン滞在の時に、欧州のキリスト者の集い（第11回オーストリア・クーフスタイン）に初めて参加しました。私の「集い」の思い出の「原点」はそこです。CSの奉仕に携わり、JCFの会員であったオペラ歌手の寿円さんを指導者として駆り出して、ミュージカル仕立てのヨナ物語を「集い」の最後に発表上演しました（劇中歌の作詞・作曲から効果音まで全て「お手製」でした！）。土曜の夜に、翌日の礼拝のためにロンドンに戻りましたが、今でも、あのクーフスタインの霧がかかった宿舎を、大勢の兄弟姉妹や子供たちがまだ残る中、先に去らなければならなかった寂しい思いも、様々なことと共に忘れられない私の「集い」の原点です。

さて、今回のパリ「お手製」の「集い」は、違う意味での、私の中の「集い」の、忘れられない「原点」となりました。それは「集い」の後、オプションの形でしたが、パリ教会の主日礼拝（聖日礼拝）に出席したからです。

私は、今後も「集い」に参加するときには、必ず主催教会および現地の日本語教会・集会の主日礼拝に出席するべきだと思います。毎週、現地の国や地域で、そこに神より遣わされ、働き学ぶ兄弟姉妹たちが、主に招かれかつ献げる礼拝、そこに共に集いやり、そして、自分もまた遣わされた所に、一旅から帰って行く。「集い」の最後に、どれだけ力を得たか知れません。それが最高の夏の「集い」の総括だと覚えました。

主よりいただいた豊かな祝福と恵み

中村 眷二

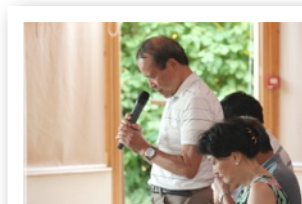
フランクフルト日本語福音キリスト教会

記念すべき「第30回ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加できたことを先ず主に感謝いたします。家内の健康上の問題も重なり、近年、中々参加ができませんでしたが、今夏は揃って参加でき、多くの恵みを頂きました。

テーマの「信仰の原点を求めて」に従って、各講師の先生方から頂いた大変熱のこもったメッセージに、神が私達1人1人に呼びかけておられることを実感いたしました。私たちはドイツのフランクフルトからの本当に小さな群れの参加でしたが、それらのメッセージを通してこのように私達に対してさえ神は使命を与えてくださっていることを強く教えられました。

神が建て導いてくださっている私たちの群れが益々主に在って成長させていただけるよう祈り続けていかなければ、と大いに励まされました。往復1,300km以上の運転でしたが、旅路が無事に守られたことも感謝でした。

このような恵まれた「集い」を主催して下さった、パリ・プロテスタント日本語キリスト教会の皆様方の労を主がねぎらってくださいることを祈ると共に心から感謝いたします。あなた方は使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。エペソ人への手紙



安部 哲さんのこと

工藤篤子
北ドイツJCF

先生方の深いメッセージ、ユーオディアの素晴らしい演奏、賛美、主にある兄弟姉妹との交わり、祈り合い・・・30回を記念する、ほんとうに素晴らしい集いでした。パリ教会の皆さんの、祈りと心の籠もったオーガナイズに心からお礼申し上げます！

1984年にスペインで信仰に導かれた私は、今年で信仰年30歳、キリスト者の集いと同じ年齢です。ヨーロッパ在住歴は31年になりますが、その日暮らしの歌手及び伝道師をしていた私は、教会の伝道師職を辞任するまで、ハンブルク以外の欧州在住邦人とコンタクトを持つことも、「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加することも出来ませんでした。やっと集いに参加できたのは、「工藤篤子音楽ミニストリーズ」（現、工藤篤子ワークショップ・ミニストリーズ）を設立した翌年の2001年、リヨンで行われた第18回目の大会でした。その後は、キリスト者の集いで各国の賛美者の皆さんと奉仕を共にさせていただくことを通して、神の喜ばれる賛美を祈り求め学ぶようになり、いよいよ、今年秋から、日本にて、これまで学ばせていただいたことをお分かちすべく、「賛美セミナー」を開始することになりました。コンサートも含めて、私の賛美活動は、「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に育てていただいたものです。主の奇しき導きとヨーロッパの皆さんとの愛と霊のお交わりに、心から感謝しています。

今回の大会では、故・安部 哲さんのことが何度も何度も語られました。30回を記念する大会で、安部さんの働きが、今のヨーロッパ日本語教会と「ヨーロッパ・キリスト者の集い」のひとつの大きな土台になっていることを認識しました。

私が安部さんのことを初めて聞いたのは、以前、日本のコンサートでよく伴奏してくださったピアニストの今村友子さんからです。今村さんは、オランダ留学中に安部さんを通して救いに導かれました。安部さんのイエス

様への情熱はすごいものだった、とよく話しておられました。パリの作田安子さんから、霊満クルセード・コーラスの一員として、安部さんの伝道旅行と一緒に回っておられた時のこととお伺いしました。オランダ南部の集会の夫人たちからも、オスロやブリーネの集会の方々からも、安部さんの話を聞くようになりました。ルーマニアを回った時には、共産圏時代に、安部さんから中に聖書が詰められた鮭を受け取り、クリスチャンになった方のお話を伺いました。その後は、アメリカでも、ブラジルでも、さらには、ミャンマーでも安部さんが伝道に行き、また支援されていたことを伺い、安部さんの活動には驚くばかりでした。

昨年出版された「この愛に捉えられて」—信徒伝道者・安部哲と霊満クルセード—（野口和子著、イーグレイプ出版）を読み始めたのは、今回の大会から戻って来からです。（昨年、すでに野口和子さんから本をプレゼントしていただいていたのに！）52歳でキリストに救われた安部さんは、全てをささげてイエス様に従い、世界各国で「証し」を始めるようになりました。収入のほとんど（ある時には9割以上!）を主にささげ、世界53か国（80か国以上とも言われる）を駆け巡りました。安部さんは、使徒行伝1:8を伝道の旗印に掲げていましたが、そこにある「地の果て」とは、福音を語ることが許されていない地であると言い、逮捕されて背と腹に焼き鉄棒を押されても、宣教の地で召されるなら本望と伝道を続けました。そして、安部さんが望まれた通り、1989年2月、オランダで宣教中に天に召されました。

昨年春、東京でお会いした執筆者の野口和子さんは、10歳以上も若返った輝くお顔で、「この本は私ではなく、主が書かせてくださった本。安部さんの炎が私にも飛び火しました。」と仰っていました。この本を読みながら、私にもその炎が飛び火しているのを感じています。安部 哲さんのイエス様への燃える愛と信仰と神への全き従順、それが、今の私にとってのひとつの目標となっています。



分科会



第30回集いに出席して

浜島 敏

善通寺バプテスト教会

30回と一口で言いますが、一回も途切れずに30回を続けるということは並大抵のことではありません。それがみなさんの祈りと努力によって続けられたと言うことは、驚くべき事のように思います。おめでとうございます。その恵みに預らせていただいたことを感謝します。最初はもっと違う名前の会でしたが（私の記憶間違いが無ければ、「日本人」という文言が入っていたように思います）。それが私の最初に出席した1996年のムッフの会の時に現在の「ヨーロッパキリスト者の集い」と命名されたように思います。

私たち夫婦の参加は今回で7回になりました。いつまで続けられるか分かりませんが、健康が許せばできるだけ出席したいと思っています。来年のベルギーでの集まりにはぜひ参加したいと願っています。それは私



の研究している最初の英語聖書翻訳（宗教改革後）を行ったティンダルが過ごし、友人を装った弟子に裏切られて官憲に捕らえられたアントワープがあるからです。ヴィルヴォードの城に幽閉されて、なお聖書翻訳の思いは強く、彼のただ一通残っている手紙には、彼の聖書翻訳に掛ける情熱が聞こえてきます。彼はヴィルヴォードにおいて殉教しました。

しかし今回の印象を述べるのがこの文章の目的ですね。今回は一言で言って、大変「パリ教会の基本姿勢」が出た集いのように思えました。讃美も伝統的なものが主であって、私たち年寄りは大変落ち着けました。ただ若い人たちの印象はどうだったでしょうか。いろいろな意味でバランスが必要なのかも思います。しかし、いろいろなところで実行委員会さんの努力が見られました。30回のテーマと

聖書箇所の一覧は皆出席の作田さんもいらしたからできたことでしょうか。本当にご苦労様でした。お疲れ様でした。どうぞお疲れが出ませんようにと願っています。奥様も元気に出席されたこと、誠に感謝です。ご一家の働きがますます祝福されるようにと祈ります。「ユーオーディア」の讃美と証しもすばしかったです。「ハレルヤ・コーラス」も歌わせていただきました。ただ、プログラムに各集会の順序が印刷されていなかったのが、ちょっと分かりにくかったです。

今回の印象として、「信仰の原点」ということで、講演者全員が、自分の信仰の原点を証しされたことが大変良かったです。それぞれの先生方の入信にいたる過程がよく分かりました。それにしても再び思うことですが、それぞれが違った方法で入信されていることです。昨年「集い」でも教えられたことですが、神様の取り扱いというのは、みんなが同じであることよりも、みんながそれぞれ違うということでした。多様性の中的一致というのでしょうか。さまざまな形がありながら、最終的に行き着いたのは主の十字架の恵みということでしょうか。信仰とは関係なく、ただ生きた英語が勉強したいだけで教会に行きだした私にも、この「おどろくべき恵み」は及んだのでした。感謝のみです。

作田さん、パリの皆様、本当にご苦労様でした。日本から出席する者にとっては、今年になってからの急激な円安になったこともあって、その恩恵を十分に受けさせていただきました。ありがとうございました。ただ一つ苦言を申し上げることが許されるならば、あまり他の集いと比較にならない方が良くないように思いました。どの集いも最大限の努力と、最高の祈りを以て準備されたものです。それぞれ地域ごとにいろいろな制約もあるでしょうし、それぞれ与えられているビジョンも違うと思います。それぞれが神様の御栄光を現す集いであつたように思います。それで良いのではないのでしょうか。そうしないとせっかくの努力も誇りと受け取られてしまいます。



”家族”にとって「集い」とは

増谷啓

シュトゥットガルト日本語キリスト教会

今年の集いは30周年でした。私にとっては12回目の参加となります。でも今回は本当に参加できるか分からない状況での申し込みでした。というのも研究グループ閉鎖のためリストラにあい、就活をしていたからです。もし欧州外で就職ということになればキャンセルもあり得ました。これまでの様々な導きを考えると『欧州



追放』はないだろうと信じていたのですが、不安が全くなかったわけではありませんでした。

集いまで1ヶ月近くとなった頃、内村先生が体調を崩されたということで、先生が担当されていたプレ大会の調整役を引き継がせていただくハプニングがありました。それからは沢山の同胞に助けられながら準備に追われて就活どころではなくなりましたが、神様は次の道を驚くべきタイミングで備えて下さいました。

オランダ南部日本語キリスト教会の姉妹が私の就活状況をたまたま聞き、ちょうどその数日前に『日本人の材料科学者』を探していると友人から尋ねられたことを思い出して、私に連絡をくれました。恐ろしいほど条件がピッタリ合ったおかげで、超特急で3回の面接をこなし、2週間後には内定をいただきました。

シュトゥットガルトから離れることは本意ではありませんでしたが、摂理としか考えられない『招き』を断ることは出来ませんでした。集いへ行く直前には家族でオランダ南部のマーストリヒトに行って単身赴任先の下宿を決め、リフレッシュした気持ちでパリへと向かうことができました。

担当させていただいたプレ大会初日は賛美で始まり、坂野先生の『いやし』に関するメッセージ、藤掛先生のコラージュ・ワークショップ、小淵先生も加えたパネルディスカッションと盛りだくさんの内容で、沢山の気付きと励ましが与えられました。とぼけていたのは、パネルディスカッションの司会を私がしないといけないことに途中まで気づかなかったことで、皆さんにご迷惑をお掛けしたことです。お恥ずかしい限りで、面目ありません。

救われたのは、その後（まだ求道中の）妻が積極的に集いに関わってくれたことです。ほぼ全ての講演と祈祷



会に参加し、先生方や兄弟姉妹の方々ともまっすぐ話すことが出来たようで、非常に楽しかったと言っています。子どもたちの発表も非常に

楽しませていただきました。この集いは子供たちにとっても毎年の楽しい『家族行事』となっています。もうすでに来年を楽しみにしています。パリ教会の皆様、CSや中高課の先生方、奉仕者の皆様、そして神様、今年もありがとうございました！

魂のホリデー

馬場晶子

ロンドンJCF

主の御名をほめたたえます。

今年も恒例の集いが終わり、夏も終わった感じがします。フォンテーヌブローの森の中、居心地の良いホテルでの修養会で身も心もリフレッシュされました。毎年一年に一度お会いする顔、顔、顔。今年も元気に参加できたことを主に感謝し、懐かしさに時を忘れおしゃべりし、祈りあいました。祈りあえる兄弟がヨーロッパ中、世界中にいるということはなんと素晴らしいことでしょう。

先生方の講話、ユーオーディアの心洗われる演奏、小中高生の元気な賛美、ツアー等々単なるホリデーではない、魂のホリデー。多くの方たちにお勧めしたい集いです。ロンドンJCFから参加された方の中でこの集いを通して主を受け入れられた方がおられたことも大きな喜びでした。

この集いのために一年間ご苦労くださったパリ教会の方たちや、関係者に心から感謝いたします。一つだけ残念に思ったことはフランスのお食事を過度に期待していただけにちょっとがっかりしました。せめてお茶やコーヒー、水を一日中自由に飲める場所が欲しかったです



パリ教会に感謝して

森 よし

ブルーネ祈りの家

フォンテーヌブローでのキリスト者の集いに参加してから、3週間があっという間に過ぎました。私たち夫婦にとっては、この夏の集いに参加するのが1年の生活の中で大切なイベントになっています。そのような訳で今年も二人で参加できたことが本当に感謝でした。



特に今年は30回という特別な集いにふさわしく、ユーオーディア・アンサンブルのフルメンバーでの演奏会が企画されたこともとても大きな恵みでした。CDでしか耳にすることの出来なかった皆様の演奏を、目前で拝聴する事が出来たことは素晴らしい思い出になりました。そして賛美の夕べでの、工藤姉妹のお証と賛美に胸がいっぱいになりました。又有志のみなさんのハレルヤコーラス・・・全てにブラボー!!でした。

一緒に参加したノンクリスチャンの女性が、メッセージ

は難しかったけれど、音楽が素晴らしかった!みんなで賛美するって心に響いてくると、興奮気味に話してくれました。私には本当に嬉しいひと時でした。今回は集いのしおりや、プログラムの随所に30年を振り返る内容があり、本当に神様の背後からのお守りと導きがあったことを改めて思わされました。集いの主催担当に当たるのがどんなに大変であるか、しかし、その大変な中から神様の祝福へと変えられ、そして神様の栄光に変えられていく・・・それを皆さんで分かち合っていく、そんな歴史がこの集いにはいっぱい詰まっていることを思わされる大会でした。

それから、ここ数年来から感じているのは、少しずつ、少しずつ世代交代がある中で、神様は絶妙に時にかなった方法でバランスを保ち、信徒の為の、信徒中心の、そして信徒が奉仕をするという集いの理念を守って下さっていることを、今回も感じました。この記念すべき30回に最もふさわしい教会が担当されたというのも神様のご配慮だったのですね。パリ教会の皆様へ心から感謝申し上げます。



主の恵みと憐れみにより

スースパンフォト

ヨーテボリ日本語家庭集会

第30回ヨーロッパ・キリスト者の集いが、神様の大きいなる栄光を、讃え、溢れる祝福のなかで終えることが出来たことを感謝いたします。この度、私はアフリカ医療奉仕で腰を痛め悩んでいましたので参加不可能と決めていましたが、パリ教会委員会の皆さんの暖かい思いやりと親切なご配慮に安心して参加致しました。心から感謝しています。



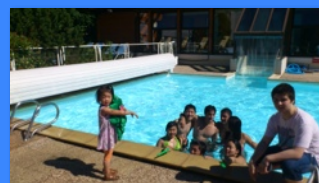
1985年神様の不思議な導きによりキリスト者の集いに神の家族として迎えられ、良き交わりと共に祈る時を持ちました。そうしてこの小さい方も主の憐れみと恵みにより長年アフリカ、インド、ルーマニアで奉仕を致しました。困難で悲惨な日々にあえぐ人たちにこの集いからの支援と祈りにより、神様の愛の働きを実践したことを証と致します。



来年も行くよ。一人でも行くから 青木裕美

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

今回、初めての参加でした。中高生に参加した13歳の息子は当初「・・・常連の輪がもう出来ているみたい。」と言っていたのも束の間、すぐに馴染み、大変楽しく過ご



させたよう
で「来年も行くよ。一人でも行くから!」と繰り返します。新顔を

優しく迎えて下さったスタッフと中高生の皆さんに、心より感謝いたします。

ユーオーディアの演奏の素晴らしさは言うまでもありませんが、ヨーロッパ中のキリスト者との合同讃美は形容し難いものがありました。このような主に捧げる讃美を各教会・集いでも出来れば、と思わずにはられませんでした。

「第30回ヨーロッパ・キリスト者の集い」

担当教会の一員として

高橋 稔



ヨーロッパ各地でキリスト者として暮らしておられる主にある兄弟姉妹とお会いでき、数日間の交流の時を持てる「集い」を毎年楽しみにしている一人です。

特に今回は、この大会開催のための担当教会でしたから、その準備期間を含めて、長〜い「集い期間」であったように感じています。「準備委員会」から始まった会場探いや「大会の主題(テーマ)選び」、続いての「実行委員会」で計画の概要が決まった段階で、一年前の第29回大会の会場で「第30回のための第一信」が配布されました。計画がさらに具体化されてきた今年2月末に「第二信」が制作され発送され、それに並行して「各部門の奉仕担当者募集」で、いよいよ教会内部の動きが慌ただしくなっていました。

「第二信」発送に続いて、参加希望者からの応募受け付けが始まると、直接の担当者に押し掛かる負担が、それこそ怒涛のごとくに押し寄せて来ました。申し込み受け付けから宿舎の部屋割り、その都度の食事の人数を確かめながらホテルとの連絡のやり取り、参加人数が確定した段階で作業を終えてプリント・製本の外注を出した「しおり」作成、ヨーロッパ各国はもちろん、世界各地からの空港や駅への到着時間と人数を調べて送迎バスの手配等々、何人もの人たちがふらふらになりながらも徹夜作業をしたりして準備にあたりました。

「第30回・ヨーロッパ・キリスト者の集い」開幕

湖に浮かぶ優雅な白鳥たちがゆったりとして静かに進んで行く姿は、のどかで優美なものですが、外からは見えない足は水の中で忙しく水を掻いている、と聞いたことがあります。会場に到着された参加者の受付もパリ教会員総動員の態勢で対応、いよいよプレ大会開始、そして本大会のオリエンテーションなどの賛美の音が響く中、参加者全員が主の臨在と祝福を感じるようになった時には、あの湖に浮かぶ優雅な白鳥の姿と「その足」として労する人たちの姿を思わされました。

大会開催直前に日本へ帰国、入院治療となられた内村先生ご夫妻のキャンセルと急遽ピンチヒッター依頼で切り抜けなくてはならなかったこと、参加者の何人かが会場に着くまでの間や帰国前などにパリ市内で受けた盗難被害など、いくつかの残念なハプニングも生じました。

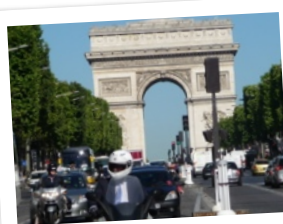
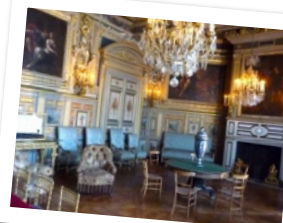
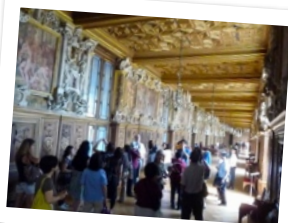
しかし、参加者のほとんどの皆さんが「良い集いでした！」と声を掛けてくださった時、CSの子どもさんたちと中高科の皆さんが「来年もぜひ来たい！」と言われ



る声を聞いた時には、私たちの小さく至らない「ただの水を汲んだ」だけの奉仕をも、主が「良い葡萄酒」という大きな祝福に変えてくださったのだなあ！と感じ、心からの感謝と賛美を主にささげました。同時に、陰の力となって労してくださったパリ教会の皆さん、参加してくださった各地の兄弟姉妹の皆さんにも心から感謝いたします。

これからも、主の栄光を現す者となるために力を合わせて行きましょう！私たちの「主は一つ、信仰はひとつ」です。

オプションツアー パリ/フォンテーヌブロー



プレ大会と中高生科

藤原 誠

仙台市・八木山聖書バプテスト教会

僕は今回初めてヨーロッパキリスト者の集いに参加した。とはいえ、本大会と並行して行われた中高生科の奉仕に携わらせてもらったために、本大会そのものには参加することができなかった。ここでは、プレ大会及び中高生科の奉仕を通して僕が神様から受けたチャレンジと恵みを分かち合いたい。



プレ大会全体を通して最も印象に残っていることは「静まって神様の声を聞こうとする姿勢」である。それは僕が常々大切にしていきたいと思っ

ていることでもあり、今回もう一度問われたことである。二日目の高木攻一先生のメッセージではヨブ記38章2節の「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者は誰か」という御言葉が語られた。

僕は集いが終わった今もまだこの御言葉を自分のこととして受け止めきれていない。慌ただしい日々の中でなかなか落ち着いて御言葉に向き合うことができずにいるが、集いで与えられたこの御言葉はいつも自分の心のどこかに引っかかっている。初日のパネルディスカッションで小淵兄は「祈る」ことは「今、神様と向き合う執念」だと表現された。僕も、諦めることなく、ヨブに与えられた尊い気付き(ヨブ記42章3節)が自分にも与えられるよう、日々の生活の只中で祈っていこうと今改めて思わされている。

中高生科の奉

仕は、体力的には相当疲れたけれど、自分にとってとても楽しい、また掛替えない貴重な時間だった。僕



は、中高生一人一人が個人的に神様と向き合っていくことの手助けが少しでもできればという思いでこの奉仕に臨んだ。しかし、自分はヨーロッパに住んだ経験があまりなく、ヨーロッパで育った日本人の子ども達の雰囲気を今一つ想像できなかった。それゆえ、中高生科の奉仕に対しては楽しみな反面、不安も少なからずあった。

いざ始まってみると、中高生たちは初めて会う僕に気さくに話しかけてくれ、おかげで僕はすぐに彼らに溶け込むことができた。ただ、奉仕者としては最後まで試行錯誤しながらの奉仕であった。日本語があまり得意でな

い中高生も少なからず居て、自分ももっと流暢に英語で会話ができればと悔しい思いも味わった。

中高生と共に過ごす「体力」と奉仕者としての「気配り」という相容れない二つのことが要求されるタフな中高生科の奉仕。毎年中高科を取りまとめ、リードして下さっている越野兄弟をはじめ、今回一緒に奉仕にあたったスタッフひとり一人の尊い働きに神様からの豊かな報いがあることを願ってやまない。



ともあれ、僕が今回の中高生科の活動の中で特に印象に残っているのは、最後の夜に行われた中高生全員での分かち合いの時である。この時間は、スタッフは一切口出しせず、完全に中高生に任せることになっていた。リーダーシップのある高校生二人がリードし、輪になって分かち合いをした。

最初は外で、寒くなってからは部屋の中で続きをした。どことなくぎこちない空気の中、皆が丸くなって座る。分かち合いをしようと言い出したはいいものの、誰も話し出す人がいない。そこでリーダーたちが自ら感想を口に

する。普段はべらべらとテンポよく喋る彼らが、自分の内面を正直に言葉にしてぎこちなく一言一言絞り出すその姿に「がんばれー」と僕は心の中でエールを送る。



しかし話は長くは続かない。そんな中、一人の高校生が意を決して自分の苦い過去の出来事とそれを通して神様と向き合った経験を告白する。そこから一気に雰囲気が変わり、一人、また一人と自分の内面を語り始める。最終的には全員が少なくとも一言は集いの感想を発表し、聞き合った。数日前に初めて会った言葉が十分に通じない20人の前で自分の内面を素直に打ち明ける彼らの勇気と互いへの信頼に、ただただ感服した。

難なく日本語が通じる20人の大人の集まりでは、きっとあのような深い分かち合いにはならないだろう。そんな素敵な分かち合いに彼らが僕も混ぜてくれたことが本当に嬉しかった。スタッフも含め、中高生たちとは今もLINEやFacebookで繋がっている。良くも悪くも、僕が中高生の頃にはなかった繋がり方である。僕は来年また集いに参加できるかわからないし、今回出会った中高生のために何ができるかはわからないけれど、神様が与えてくれたこの出会いを大切に、彼らと共にこの時代を歩いていきたい。

主にこんなにも愛された私
(必ず辻褄を合わされる主のみ業)

作田安子

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会

イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」ルカ9章23節

ヨーロッパ・キリスト者の集いは、毎年、翌年も出席できるものと安易に考えていましたが、初回から30回まで皆勤で出席できたことは私にとって、一方的な主の恵み以外の何ものでもないことを今回知らされました。



初回は1984年、当時デュッセルドルフ日本人教会の会員・伊藤和人兄によって「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです」の御言葉（エペソ4章5節）と御霊に押し出されて、西ドイツのブッパータルで行われました。伊藤兄

はヨーロッパの各教会、集会に呼びかけられ、安部哲兄の協力も得て70名弱の参加者でした。

私は7年前、日本に住む長女のお産を手伝うため帰国した折、成田で骨粗相症と知らずに、荷物をカートに乗せようとして背骨をやられてしまいました。一ヶ月の東京滞在中、治療を誤ったため悪化してしまい、主人に迎えに来てもらいフランスに戻りました。パリに住む親しい友人の紹介で整形外科の医師に診てもらったところ、即入院となりました。

入院中、主から大きな恵みをいただきました。朝早く、大きな部屋に一人伏せていた私は、小さな声で賛美していると色んなことが思い出されました。主人のこと、子供たちの事を思うにつけ、悔い改めの涙が止まらず、主の前に心から懺悔しました。私にとってこの入院は、主にいただいた恵みだと、心から感謝しました。

私を入院へと導いて下さった医師が優秀な外科医を紹介して下さい、その病院に移って手術を受けることになりました。私はそのとき65歳でした。医師は私に「5年後には手術は不可能になりますから、受けるなら今が最善です。しかしこの手術は大変な危険を伴うので、手術中に命を失うか、術後に大きな障害が残る可能性があるの、よく考えるように」と何度も念を押されました。私はすべてを主に委ね、手術を受ける決心を致しました。多くの方々の祈りに支えられて、不安は全くありませんでした。

2008年5月に2度目の大きな手術を受けた後、2ヵ月ほどのリハビリ期間中にヴィッテンベルグでの第25回の集いが間近に迫っておりました。手術医の許可とりハビリセンターの医師の「あなたの目的は、こんなところについて入っていることではないでしょう」との励ましの

言葉に押されて、集いの前日に退院し、当日のベルリン行きの飛行機に飛び乗ることが出来ました。主の御心でなければ参加が叶わないことを思われ、主に心から感謝しました。

今年の第30回に参加することには、なにも疑っていませんでしたが、集いの1ヶ月前に左足に異常な痛みを覚え、腫れもひどく病院へ行きました。検査の結果は部分的な傷からばい菌が入ったためとの事でしたが、3週間たっても痛みと腫れが収まらず、その上左腕にも痛みが始まりましたので、今年の集い参加は叶わないと思いました。

しかし、祈っているうちに不思議な事に、集い2日前に左腕の痛みが消え、足も随分良くなってきました。集い参加が可能となり、再び主の憐れみと御心を経験されることになりました。私にとって大きな経験であり、主への感謝と賛美の祈りをしました。集いでは受け付け奉仕を志願していましたが、「安子さんは事務的な事やお水を配ったりできないから、受付の近くで皆様を迎えて下さい」とのことで、到着された方々と最初の交わりの特権が与えられました。祈って下さっている方、懐かしい方々と涙の対面の時を感謝しました。

また、集いの前日、オランダ南部の姉妹から電話があり、南部の姉妹たちが集いの期間中の私の介護について、祈りながら何が出来るかを話し合っていますとの連絡をいただきました。この事を知って胸が熱くなり、神様に感謝の祈りと姉妹たちのためにも祈らせていただきました。と同時に、いかに多くの方々の祈りによって今の私があるかを痛感いたしました。7月3



1日から8月4日まで4人の姉妹（オランダ南部3人、日本1人）が私にして下さった徹底した愛の行為はとても筆舌では表すことのできない、感謝以外の何ものでもありません。

神様は最近、私に健康上の試練を与えられ、苦しいことも多く、悲鳴のような祈りを捧げておりましたが、姉妹方の愛の行為がそれらの苦しみを吹き飛ばし、神様は結果的には辻褄を合わせられる方だと再認識いたしました。今回の集いでも私を見て喜んで下さる皆様にお会いでき、感謝の気持ちでいっぱいです。

小さき者にも大きな愛をくださる主を実感し、今までにない喜びと感謝に心が溢れています。私は今、冒頭の御言葉の前に静かに坐して、これからの歩みのすべてを主にお委ねし、主が与えて下さる十字架を喜んで負って歩んで参りたいと願っています。主に栄光がありますように。

ハバクク書3章17節～19節

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実りをならせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎からいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。

第30回ヨーロッパ・キリスト者の集いを顧みて

作田銀也

パリ・プロテスタント日本語キリスト教会（第30回 実行委員長）



私にとりまして今年の集いには三つの目的がありました。第一に主催教会の実行委員長として、奉仕の一つひとつが主に栄光を帰するためのものであること。参加されたすべての方々が霊的養いを受けてそれぞれの持ち場に戻られること。「信仰の原点を求めて」というタイトルでしたが、「求めて」というよりは「信仰の原点に立ち返って」自分の信仰を吟味することでした。

プレ大会の第3セッションから最後の主日礼拝まで10回のメッセージがありましたが、講師の先生方が選ばれた聖書箇所が一度も重ならなかったことは驚きでした。また、良く準備されたメッセージは私達の心を打ち、主を崇めるにふさわしいものでした。内村先生が急に一時帰国され、坂野先生がピンチヒッターを快諾くださったことも感謝でした。賛美に関しては極力全員で賛美する方針を取り、賛美チームの出番も賛美のタベと閉会礼拝のみとなりました。

それでも主に捧げた賛美に多くの方が感動され、共に主を賛美する機会となったことは感謝でした。ユーオーディア・アンサンブルの皆様には開会礼拝から閉会礼拝まで賛美及び奏楽をして頂きました。特に賛美コンサートと賛美のタベでの特別賛美は聴く人の心深くまで這入り込み、歌詞のない演奏に多くの方が涙を流し、感動の連続でした。ユーオーディア・アンサンブルを講演などのある正規の時間帯にお願いできなかったのは、代表者会議での事前了解を得ていなかったこと、また2時間という演奏時間を通常のプログラムの中で取ることが困難なためでした。自由時間での開催にもかかわらず多くの方が集って下さり、主に感謝する楽しい時が持てたことは幸いでした。同じく、自由時間にもたれた、帰国者の会（帰国後の信仰生活）では関東からは横山基夫先生、関西からは有木義岳先生がお話し下さり、集まった方々と共に有意義な時が持てました。

スモールグループによる分科会はテーマごとにグループを分け、希望に応じて分科会に参加できる方法を取りましたがおおむね好評のようでした。CS、中高科の学びも素晴らしく、発表を見てもいかに素晴らしい学びをされたかが良く解りました。観光については参加された方に喜んでいただいたことと思います。奉仕くださったすべての方々に心から感謝いたします。



目的の第二は、昨年来4人の作業で検討を重ねたこの集いの「沿革」と「目的」案を代表者会議の場で採択いただくことでした。何度も修正後、簡素化された最終案が全員一致で採択されたことにホッとするとともに感謝に堪えません。今後の集い運営に役立てていただければ幸いです。

第三は私ども個人的な事です。渡仏40年。パリ日本語教会と共に33年、そして集いと共に30年。これは私達夫婦の歴史です。どちらが欠けていても、私達をこんなに長くフランスに留まらせることは、出来なかったと思います。これから先、主に用いられる小さき存在として、フランスに留まれるかどうかは主にお委ねしなければなりません。主にある素晴らしい兄弟姉妹の励ましによって今回も夫婦そろって参加することができました。とくに、オランダの姉妹方が、少しでも作田を休ませようとの配慮から、集い期間中24時間体制で、家内の世話をして下さいました。姉妹方の愛と思いやりに触れ、心身ともに休息が与えられました。心から主に感謝いたします。



2013年 第30回 ヨーロッパキリスト者の集い 代表者会議に於いて 集いの「沿革」と「目的」が採択されました。以下、全文を掲載します。 文責 作田銀也

「沿革」

1984年夏、当時日本人学校の教師として派遣されていた伊藤和人兄（当時のデュッセルドルフ日本人キリスト教会）の呼びかけにより「第一回ヨーロッパ・日本人キリスト者の集い」が西ドイツ・ブッパタール近郊のランゲンベルクで2泊3日の日程で開催されました。

聖書の「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」（エペソ4：5）の主題のもと、ドイツ、フランス、オランダ、オーストリア、ノルウェーから60余名の参加がありました。

聖書研究と証し、祈り、交わり、講演、そして礼拝をともにし、参加したすべての者は、大きな主からの恵みと感動を得、翌年も是非集まりたいと再会を期待しつつ会場を後にしました。

この時期、ヨーロッパに点在する多くのクリスチャンの群れは「集会」の域を出ておらず、わずかにデュッセルドルフ、ケルン・ボン及びロンドンJCFが教会としての形を整えていました。

第一回目の集いから、すでにこのように多くの参加者が与えられたのは、信徒伝道者としてヨーロッパ各地で集会興しに奮闘しておられた安部哲兄のネットワークを通じての呼び掛けが功を奏したものであります。

1986年の第3回大会には、他に例を見ないプロテスタント超教派の集い（修養会）が行われていることを聞き、アメリカや日本からの視察を兼ねた教職者の参加もありました。

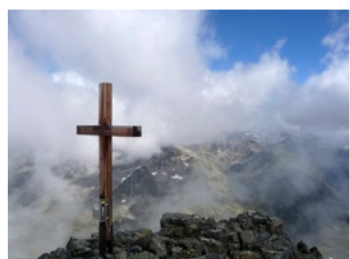
1988年の第5回大会までは、第一回の呼び掛けにもありますように「日本人キリスト者の集い」と表示されていたのを「日本語キリスト者の集い」に改める決定がなされました。日本語を話す日本以外の国籍の方（外国の方と結婚されて日本国籍を無くされた方を含む）が多数参加されていたためです。

これを契機にヨーロッパのほとんどすべての日本人教会、日本人集会が名称を日本語教会、日本語集会所と改めました。「ヨーロッパ日本語キリスト者の集い」は後に「日本語」も外れて、現在のようになり「ヨーロッパ・キリスト者の集い」として今日に至っております。一信徒の呼び掛けから始まった年に一度の信徒大会（集い）ではありますが、各教会、集会を導いておられる奉仕者が集いの大きな責任を担っております。御言葉を取り次ぐ説教者、講演者の奉仕、信仰の証や賛美の奉仕を通して、主に生かされている喜びを分かち合いました。

2001年の第18回大会での代表者会議において、この集いが「信徒大会」であること、教職者も与えられた賜物に応じて奉仕をし、参加費用も出し、例外を含めながらも謝儀を受け取らないことが確認され、今日に至っています。

「目的」

集いはヨーロッパに点在しているキリスト者とそれらの教会、集会による任意の集まりで、



- 1、神の御前で合同の礼拝をささげ、
- 2、主にある喜び、重荷を分かち合い、互いに励まし合い、絆を深め、
- 3、聖書を中心とした学びと交わりにより霊的成長を計ること、
- 4、共通の使命であるキリストの福音の宣教協力を計ること、などを目的としています。



「第30回ヨーロッパ・キリスト者の集い」レポート

松林幸二郎 スイス日本語福音キリスト教会



パリ・オルセー美術館にあるミレーの「落ち穂拾い」「晩鐘」「種蒔く人」は、光に溢れる印象派の出現前に制作され、渋くて落ち着いたある画風は私を魅了して止みません。私がキリスト者になってから、その名画の背景には旧約聖書（申命記24章19節

—21節、ルツ記）の影響があることを知り、このミレーがパリの画壇を離れて移り住んだというパリから南60kmにあるバルビソンの村と、それを取り囲む田園風景を、また、私が敬愛する作家・芹沢光治良（こうじろう、1896-1993年、「巴里に死す」でノーベル文学賞候補に）の作品にもフォンテーヌブローやバルビソンの名がしばしば登場していて、この憧れの地を一度この目で見たいとずっと願ってきました。

その憧れの地、フォンテーヌブローの森の片隅で、今年で第30回目となる記念すべき「ヨーロッパ・キリスト者の集い」が、7月31日から8月4日までパリ日本語プロテスタント教会の主催で開かれました。今回の実行委員長は、第1回目から30回連続出席という兄弟でその重責を誠実に果たして下さいました。

「集い」には、欧州各地、祖国日本、アジア、そして北米から集められた、イエス様を救い主として仰ぐ兄弟姉妹287名は、主の臨在と祝福のなかで、恵みをシャワーのように頂きました。

いまや世界各地で開かれるファミリーキャンプやリトリートのモデルとなったと言われる「集い」は1984年の夏、西ドイツ・デュッセルドルフ近郊、ランゲンベルグで

欧州各地に散らばって住む邦人キリスト者が、共にみことばを学び、交わりを持ち、信仰を育くもうと、デュッセルドルフ日本語キリスト教会の一兄弟（当時、デュッセルドルフ日本人学校教師）の呼びかけに応じて集まったのが始まりでした。以後、30年の長きに渡って、毎年ヨーロッパの各地に会場を替え、聖書を誤りのない神のことばとする聖書信仰に立つ在欧邦人キリスト者とその家族に加え、帰国された信徒、宣教師も加わって、「信徒による信徒のため」のプロテスタント超教派の大会となって今日に至り、その性格と創立精神はいまもそのまま受け継がれています。



ここでは、教職者は与えられた召命と賜物によって奉仕、助言をしますが、一人の信徒として参加します。これは、日本における教職者が主導する教派、教団単位の聖会や修養会と大きく異なる点です。



今年の「集い」は、例年の様に本大会前日の水曜日午後のプレ大会によって始まりました。今年のプレ大会初日はSLIM (Servant Leaders In Ministry) と呼ばれる次世代の信仰者を育成するセミナー、そして翌日の午前には「本大会にむけて

霊性を高める」のテーマで120名の参加者を得て持たれました。そこではウィーン日本語教会の高木攻一牧師が聖霊に導かれた深い内容のメッセージをして下さいました。

8月1日（木）から4日（日）までが「信仰の原点を求めて」をテーマに、高橋稔パリ日本語プロテスタント教会牧師の開会礼拝における説教に続き、今年傘寿を迎えられ、今なお青年宣教師の気概で主のために働かれる田辺正隆牧師（フランクフルト日本語教会）や坂野慧吉牧師（浦和福音自由教会）を始め、欧州各地で牧会される安藤寛之牧師（ミュンヘン）、小川洋牧師（ロンドン）井野葉由美牧師（北ドイツ）齊藤篤牧師（ケルン・ボン）岡田直丈牧師（ブリュッセル）と孫信一牧師（プラハ）らによる30回目に相応しい濃い内容の熱いメッセージが出席者の心を捉えました。その後、分科会に分かれて学びの時と交わりの時を持ちましたが、通常、年に一度しか会えない「家族」との主にある交わりは、それは貴重で祝福された時となったのは言うまでもありません。

また、ヨーロッパにおける

「集い」は、音楽家や留学生が多いこともあって、音楽的なレベルが高いことも特徴といえるでしょう。今年も、昨年のオランダでの集いに続いて、日本から25年前に創立されたクリスチャン音楽家グループ「ユーオーディア・ア



ンサンブル」のオリジナルメンバー6名が来仏され、開会礼拝から、土曜日午後の賛美コンサート、そして閉会礼拝まで素晴らし

い演奏で、聖歌隊とともに主を賛美して下さいました。

私は2001年にフランス・リヨンで開かれたパリ教会主催の第18回「集い」以来、今回まで連続出席という幸いを得ました。ビデオと写真撮影、そして2008年から証/感想集の編纂という奉仕を主催教会の依頼でさせていただいたり、2006年のスイス教会主催の「集い」では実行副委員長として働くという貴重な体験もさせて頂きましたが、これは計り知れない恵みとなりました。このヨーロッパの「集い」には、すべての教派、教団、教理を越え、ただただ主イエスを真の救い主と仰ぎ、罪赦され贖われ救われた心貧しきキリスト者が、主にあって一つになり、心を一にして主を賛美し、そして再び世界中に散らされ、主の証人として宣教の業に励むのです。教派教団の壁を越えて一つになれず、閉鎖感に覆われる日本のキリスト教界が、もし、この「集い」に学ぶとすればこれではないでしょうか。そして、主にあって一つになることによって初めて、主は祖国日本にリバイバルを興して下さいますと私は信じています。



岩波書店のシンボルマークとなったミレーの代表作「種蒔く人」は、いみじくも第30回目の集いがあった地で描かれ、それは「福音とみことば」という「種」を一途に蒔く人を彷彿させます。農業や園芸に携わる人が豊かな収穫を得る為に、まじりけの無い良い「種」が不可欠であることを知っているように、福音も聖書に正しく明確でなければなりません。そして蒔かれた後の「福音」という「種」は、その後のケアが必要なことは言うまでもありませんが、神様が責任をもって育てて下さいます。このフォンテーヌブローで豊かな霊的糧を受け祝福が注がれ、そしてそれぞれの地に散っていった「種蒔く人」が、熱き心で福音を宣べ伝えることを主は求めておられます。



ある著名な伝道者のことばです。「宣教、宣教、宣教、24時間宣教に務めなさい。もし、必要ならば言葉で！」アーメン。

